

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.233

5-7

May-July 2019

アル
ゲリ
ツ
チ伝説

特集

02



2017年水戸室内管弦楽団第99回定期演奏会より

- 06 今昔雅楽集 二.舞の絵巻
- 08 西山まりえ(チェンバロ&バロック・ハープ)インタビュー
- 10 水戸芸術館のステージに立とう!
- 11 「ブンカ」と「ゲージュツ」のはなし その2
- 12 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

photo©Michiharu Okubo

アルゲリッチ伝説

文：高巢真樹



©Rikimaru Hotta

「Mitoって、イタリア語では“神話”って意味なのよ」
鍵盤の女王はそう吹き、リハーサルを終えた舞台袖で
いたずらっぽく微笑んだ。

出合いの鮮烈な夜

マルタ・アルゲリッチと、小澤征爾
総監督率いる水戸室内管弦楽団
(MCO) による初共演が、別府アル
ゲリッチ音楽祭との共同制作で実現
したのは、2017年5月のことだった。
曲目は、ベートーヴェン作曲〈ピアノ
協奏曲 第1番 ハ長調〉。7歳のときか
ら彼女が弾いている代名詞のような
作品だ。アルゲリッチが紡ぎだす演
奏はどこまでも自由で無限のニュア
ンスがあり、マエストロ小澤や名手た
ちと交わす音の戯れはあまりにみずみ
ずしいものだった。一音も聴き逃すま
いと耳を澄ませていた聴衆の拍手
は、いつまでも鳴りやまなかった。

その成功は、翌年〈第2番〉で再共

演しようという約束へ。しかしその計
画はマエストロの出演が叶わなかっ
たため持ち越しに。代わりに彼女か
ら提案されたのは、「指揮者なし」で
のショスタコーヴィチ作曲〈ピアノ
協奏曲 第1番 ハ短調〉だ。スリリングな
演奏とはこのことか。鋭利な刃物を隠
し持って喰う皮肉やユーモア、籠が
外れたようなエネルギーの爆発な
ど、ショスタコーヴィチの世界観が抗
い難い魅力をもって表現された。そん
なアルゲリッチの演奏に、トランペッ
ト奏者セルゲイ・ナカリャコフによる
絶妙なソロが絡み、MCOの面々もソ
リストたちに振り落とされまいと加
勢。火花を散らしながらクライマックス
まで駆け抜けるや否や、客席から

熱狂的な反応が沸き上がった。

「ああ、生きている！」

吉田秀和 水戸芸術館初代館長は
かつて、彼女の演奏の思い出に接す
ると、そこから生命が流れ出てきて、
自分はその光を浴びてもう一度生き
かえるような気がする、と率直に書き
綴った。筆者もだが、きっと世界中の
聴衆がその言葉に頷くのではないか。

そして今年の5月、アルゲリッチと
MCOは3度目の共演のときを迎える。

アルゲリッチの原点

「生ける伝説」という言葉がふさわ
しいピアニストのこれまでの軌跡を、
あらためて辿ってみたい。

マルタ・アルゲリッチ (1941～)
は、アルゼンチンのブエノスアイレス
生まれ。ピアノは5歳から、名教師
ヴァンチェンツォ・スカラムツツアに学
んだ(ブルーノ・レオナルド・ゲルバー
も同門の弟子)。幼少の頃に神童と呼
ばれる人物は、驚くようなエピソード
に事欠かないものだが、彼女は7歳
で、モーツァルトの〈ピアノ協奏曲 第
20番 ニ短調〉、ベートーヴェンの〈ピ
アノ協奏曲 第1番 ハ長調〉、その間
にJ.S. バッハの〈イギリス組曲 第3番
ト短調〉を弾いた。しかも一夜にし
て。また当時からブエノスアイレスに
は、世界有数の演奏家が訪れてお
り、幼いマルタはクラウディオ・アラ
ウ、ヴィルヘルム・バックハウス、ワ
ルター・ギーゼキングといった名匠た
ちの演奏にふれることができた。

若い頃、アルゲリッチが特に強い
影響を受けたのがフリードリヒ・ゲル
ダだ。1951年、彼女はゲルダのベー
トーヴェンを聴き、自由で開放された
精神を持つピアニストの演奏に感銘
を受けたという。弟子とはならない主義
だったゲルダも彼女の天賦の才に驚
き、ウィーンに来て自分のもとで学ぶ

よう提案した。こうして彼女は1955年からヨーロッパに移り、本格的に芸術の道へと進んだ。

1957年にブゾーニとジュネーヴ両国際コンクールを制し、1965年のショパン国際ピアノコンクールでは圧倒的な優勝を遂げ、世界の檜舞台へ。彼女の半生を綴ったオリヴィエ・ペラミーの名著『マルタ・アルゲリッチ 子どもと魔法』(音楽之友社 2011年)では、彼女の若き頃についてこう綴られている。「…強靱な肉体と、淡い光の繊細なニュアンスから仄暗い翳りまでを表現する精緻なタッチ、触れるだけで血が噴き出しそうな儚さと、高度の要求に応じた技巧。人々は彼女の“童子のような笑み”と“表情一つ変えない顔”に見惚れ、批評家の一人は記事をこう締めくくっている。“ピアノを弾く女性を見たという気がしない。それよりも、音楽に奉仕して内面を炎で焼きつくす芸術家の魂を目のあたりにしたという思いだ”」。年月を重ねての成熟や深化は言うまでもないが、その源にある音楽性は、時を越えた今もおおげしい。

信頼する仲間とともに

小澤征爾とのベートーヴェン

アルゲリッチはある時期から、ソリストとして一人で生き一人で弾くよりも、お気に入りの協奏曲や室内楽を仲間たちと奏でることを選ぶようになった。長年パートナーシップを結んだ音楽家としては、指揮者のクラウディオ・アバドやシャルル・デュトワ、ヴァイオリンのギドン・クレーメル、チェロのミッシェル・マイスキー、ピアノのネルソン・フレイエなどがあげられる。

「室内楽」を大事にしている彼女にとって、同じ志を持つ小澤総監督とMCOとの出逢いはある意味必然

だったのではないか。いずれも、強く輝く巨星のような二人は、70年代にはボストン響とプロコフィエフ〈ピアノ協奏曲 第3番〉を、80年代にはベルリン・フィルとラヴェル〈ピアノ協奏曲 ト長調〉、バイエルン放送響とベートーヴェン〈ピアノ協奏曲 第1番〉を演奏するなど、長年世界を共に渡り歩いてきた。

「これは室内楽のひとつの理想だ」——2017年の初共演を思い返すと、そんな思いが浮かぶ。ここ数年、演奏活動を厳選しているマエストロがいま情熱を注いでいるのが、MCOとのベートーヴェンの交響曲だ。揺るぎない統率力で力強く、また妥協なく音楽の流れをリードしつつ、精鋭揃いのメンバーの澁刺とした掛け合いに委ねる部分も持ち、実に清新で生命力あふれる演奏を繰り広げてきた。一方、アルゲリッチにとってベートーヴェンは、6歳のときにクラウディオ・アラウが弾く〈ピアノ協奏曲第4番〉に感銘を受けて以来、初恋のような存在だという。そんな彼女にとって、今のマエストロ小澤とMCOはこれ以上ない共演相手といえよう。前述の初共演で、マエストロや名手たちと親密に語り合いながらアルゲリッチが紡ぎ出

す音は、どこまでも若々しく、艶やかだった。音楽が駆けてゆく。まばゆいばかりの即興性を湛えた演奏は、自由な駿馬を想わせた。生きていくという喜びが、音楽の中で輝いていた。

奏でること、生きること

「彼女の演奏は、まさに共存の音楽で、イマジネーション。楽器を超えた音楽をやる人なんだよね」。終演後、あるMCOメンバーが興奮気味に語った言葉は、アルゲリッチという稀代の芸術家の真実を捉えているとともに、MCOがずっと理想としてきた音楽の在り方とも響き合う。

今度演奏されるベートーヴェンの〈ピアノ協奏曲 第2番変ロ長調〉は、グルダが弾くのを聴いて、アルゲリッチが自分のレパートリーにしようと決めた曲だ。今回はいったい、どんな新しい音色や光を発見させてくれるだろうか。彼女は映画「アルゲリッチ 私こそ、音楽!」の中で、こう言った。

「音楽との関係はいつも新しいわ、愛と同じね」

その美しくも魔法のようなひとときを、心待ちにしたい。



2017年 水戸室内管弦楽団 第99回定期演奏会より ©Michiharu Okubo



2018年5月 第20回記念別府アルゲリッチ音楽祭 ©Rikimaru Hotta

アルゲリッチの魅力、 そして別府アルゲリッチ音楽祭

文：伊藤京子

マルタ・アルゲリッチの名が世界に轟いたのは1965年ショパンコンクール優勝の時でした。そしてその日から半世紀にわたって、音楽界の中心に輝き続けています。その当時ドイツ語読みの、アルゲリッチ、と言われていて「アルゲリッチそれともアルゲリッチ?」と問われて、「どちらでも私なのでお好きなように」と答えた、とのこと。これはどういう風に見られるのか、ということには興味のない彼女らしいエピソードかもしれません。

先日若い人たちが、キャリアを積むことの難しさが話題になった時に、ある音楽事業者が「アルゲリッチはキャリアには逆行をすることばかり実行したが、全て失敗をした」と言われた、と話していました。これも彼女の人の表しているように思います。ショパンコンクールでの様子が放送された時にいっぺんにその演奏の虜となり、その後ミュンヘンでの出会いから私たちは42年の月日を共に過ごしてきました。よくアルゲリッ

チさんてどんな方ですか?と尋ねられるのですが、これはとても難しい質問です。自分自身のこともこうだ、とは未だにわからずに悩む日々なので、稀有な天才を分析するのは本当に難しいのです。

いつも相反することが存在している、とご本人の言ですが、双子座生まれ、ということと関係があるのかもしれないですね。必ず星占いの星座を訊ねては分析をするのがどうやら好きなようで、私も出会って翌日に誕生日を聞かれました。

これまでの経験からコンピューターのように一度記憶すると忘れない頭脳と、どこまでもやさしい心を持った人柄、ということ間違いのないと思います。

性格も食べ物の好みも本当に違うので、今もへえ、そうだったのと発見することも少なからずありますが、それを面白がってこれ好き?と訊ねられ好きじゃない、と答えたらあよかった、とお蕎麦を一人で嬉しそうに食べたりしている姿は少女のようです。

しかし、こと音楽に関しての飽くなき探究心はいつも驚嘆させられることばかりで、とにかく音楽が何よりも大好き、そして何も考えずに無心に没頭できるもの、なのだと感じます。このことは演奏を聴かれる皆さまがよくご存じのことです。

アルゲリッチと共にこの日本で音楽祭を開催するようになって、プレイヤーを加えると25年になりますが、当初誰もが一回あれば奇跡、と言われていました。その期待を見事に裏切って年月を重ねる中で様々な社会の環境に驚きながら、次第に芸術の社会での役割を考えるようになりました。そして公演も一過性のもではなく、未来へ繋いでいけるようなものを目指したい、という気持ちが強くなったように思います。



2018年12月 ピノキオコンサート(ローマ市・在イタリア日本大使公邸にて)
アルゲリッチ氏と伊藤氏 ©MIRAI PULVIRENTI

ここ水戸芸術館の皆さまとの出会いも私たちにとり、とても意味のあるものとなっています。

小澤館長は音楽界の宝ものであり、この水戸市が国内でも稀有な芸術振興を推進され、市民の皆さまの芸術や音楽家に対する穏やかな温か

さがここにはあります。その本質や役割を行政も明確に認識され、私たちのお手本でもあります。人類の至宝でもある小澤館長とアルゲリッチのご縁に心から感謝申し上げ、こどもたちが生きる未来が音楽のある平和な社会であるように祈りたいと思います。

●プロフィール

伊藤京子(いとう きょうこ)
ピアニスト。(公財)アルゲリッチ芸術振興財団副理事長。福岡県出身。プゾーニ国際コンクール第3位入賞後、シノーポリ、サヴァリッシュとの共演をはじめ国内外での活動を経て現職に就任。新日鐵音楽賞「特別賞」、JASRAC音楽文化賞、第77回西日本文化賞等受賞。

1センチから生まれる幸せ

文：倉田尚彦



あまり知られていないことだが、小さなアップライトピアノから立派なグランドピアノに至るまで、その鍵盤の可動範囲は1センチである。舞台上上がったピアニストに与えられるのも、わずか1センチしか動かすことのできない鍵盤と3本のペダルだけである。その鍵盤の奥に収められた打弦機構に細かい調整を施し、自在な演奏ができるように整備するのが、私たちコンサート調律師の仕事である。

私が初めてアルゲリッチのコンサートの調律を担当したのは、1993年の国際馬場財団のコンサートだった。その後ラビノヴィッチとのデュオやクレメル、ラトルとの共演など来日公演の多くを手がけさせていただいた。しかしそんなある日のコンサートの終演後、「私はこれまでこんなに酷いピアノで弾いても本番になったら必ずハッピーになれたのに、今日はハッピーになれなかった。」そう言い残して楽屋に引き込んでしまったのだ。担当マネージャー

氏の後日談によると、ようやく楽屋を引き上げたのは深夜過ぎであったという。「ああ、この方の仕事を許されることは二度とないのだな。」そう覚悟したがそんな事よりも、どんな演奏会であれ至らない私がピアノを準備したばかりに、ピアニストがたった一度しかない本番にハッピーにならないのだとしたら。そう思うと、私が乗り越えなければならないこの仕事の難しさ、恐ろしさというものを改めて突きつけられた気がした。

それから何シーズンかが過ぎ、再び幸運なことに別府でのCD収録の調律を担当させていただいた。この時には、「あの日」以来、一から手探りで模索してきたピアノの音についてのあれやこれやを仕事に生かすことが出来たように思う。以来20年にわたり、別府での音楽祭をはじめとする数多くの演奏会で調律を担当させていただいた。彼女に関しては、ピアノの音や調整の好みというものを意識して仕事することは特にない。ただ、相手はおおよそピアノという楽器の持つ機能と表現の可能性を知悉しているピアニストである。私の仕事は、リハーサルで演奏に耳を傾け彼女の意のままにピアノが反応しているかを感じ取り、必要な修正を加えてゆくことである。そうし

て迎えた本番で、彼女が1センチの可動範囲から生まれているとはとても信じがたい自由多彩で深遠な音楽を、いとも容易げに紡ぎ出す奇跡に何度も立ち会うことができた。

「ピアニストにハッピーな本番を迎えてもらいたい。」そんな思いで日々ピアノの調律をしてきた私にとって、これほど幸福なことがあるだろうか。

●プロフィール

倉田尚彦(くらた なおひこ)
ピアノ調律師。株式会社松尾楽器商会で約30年にわたり、内外の著名アーティストの舞台を陰で支えてきた。現在、同社委託技術者。

■公演情報

水戸芸術館開館30周年事業
水戸室内管弦楽団・別府アルゲリッチ
音楽祭共同制作

水戸室内管弦楽団 第103回定期演奏会

2019.5.26(日) 19:00、28(火) 19:00
小澤征爾(指揮)、
マルタ・アルゲリッチ(ピアノ)
S席¥20,000/A席¥18,000/
B席¥15,000 [全席指定]

●プログラム

[第1部]指揮者なし
ハイドン：
交響曲 第6番 二長調(朝) Hob.I-6
ウェーベルン：
弦楽のための5つの楽章 作品5

[第2部]小澤征爾(指揮)、
マルタ・アルゲリッチ(ピアノ)
ベートーヴェン：
ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品19

再発見・雅楽

あるいは再発見・日本

文：篠田大基



「今昔雅楽集」前回公演 《露台乱舞》より

昨年ご好評いただいた七夕の日の雅楽公演「今昔雅楽集」の第2弾を、7月6日(土)に開催いたします。今回は「舞の絵巻」と銘打って、前回十分にご紹介できなかった舞の音楽を中心に贈ります。プログラムのメインは舞楽の古典3曲。まず、左方(唐楽＝中国系の渡来音楽)の平舞(穏やかな舞)で、『源氏物語』に登場することでも名高い《青海波》。これに対して《蘭陵王》は左方の走舞(活発な舞)の代表曲で、学校の音楽の教科書にもよく採り上げられる舞楽で最も有名な演目です。この《蘭陵王》と番舞(対の舞)で演じられるのが右方(高麗楽＝朝鮮系の渡来音楽)の走舞の《落躑》で、『納曽利』の別名でも知られています(舞人の数によって曲名が変わります)。この3曲で、平舞と走舞、左方の舞と右方の舞という舞楽の全体像が分かるプログラムになっています。

雅楽を聴く楽しみとは何だろう？と自分なりに考えるなかで出会った言葉があります。作曲家で日本の伝

統音楽に造詣の深い増本伎共子氏の著書『雅楽入門』(音楽之友社、新版2010年)の一節です。増本氏はこの本のなかで雅楽の理論を説明する際、西洋音楽の知識や常識を一旦忘れて、柔軟な感性で接するようにと勧めます。「そうすれば、〔中略〕より広い視野と聴覚とで音たちを考えるヒントが生まれ、未知の世界(実は自分の国の音楽なのだが……)を体験することができると思う。それはちょうど、エスニック料理を初めて食べるときと同じような体験なのではなからうか?」(p.195-196)

雅楽がエスニック料理? 意外なようで、もしかするとこれは絶妙のたとえかもしれません。今回の演奏会で採り上げる現代雅楽作品《紫御殿物語・鳥瞰絵巻》の作曲者である伊左治直さんも次頁でお書きのように、雅楽とはもともと、アジア大陸各地の“エスニックな”音楽の集合体なのですから。増本氏の文章は、雅楽の理論を学ぶための助言として書かれた言葉ですが、同時に音楽の聴くコツを示唆しているようでもあります。

舞楽で奏される「追吹」や「退吹」は、私の好きな雅楽の響きです。今回の演奏会では《蘭陵王》で舞人が登退場するときの音楽《陵王乱序》と《安摩乱声》において龍笛が吹く演奏法です。西洋音楽の用語で説明すれば、追吹は拍節的なカノン、退吹は無拍節のカノンということになります。しかし雅楽は西洋音楽とは異なる原理でできているので、ずれた旋律同士がぶつかり合い、刺激的な音響が生まれます。西洋音楽の感覚からすれば、耳障りな不協和音に思われるかもしれません。聴き方によっては前衛音楽のようでもあります。料理にたとえれば、まさに香辛料のきいたエスニック料理といったところでしょう。

雅楽は日本の伝統音楽です。雅楽を耳にすると、絵巻物のなかの平安貴族の姿や、荘厳な宮廷、神社仏閣の風景、そんな日本ならではのイメージが自然と想像されます。その雅びやかさ、美しさを味わう一方で、試みに“日本”という先入観を取り去って雅楽を聴いてみると、また別の面白さ——私たちの知らない“日本”——が(再)発見できるかもしれません。加えて現代の私たちが親しむ西洋音楽の感覚から自由になることも、増本氏の言葉のとおり、雅楽をより楽しむコツでしょう。何しろ雅楽が成立した日本とは、現代の日本と地続きでありながら千年以上隔たった、現代とは異なる文化の風が吹き、異なる音楽観の土壌が広がる“日本”なのです。

わたしが感じる雅楽の魅力と 《紫御殿物語・鳥瞰絵巻》のことなど

文:伊左治 直



雅楽は世界最古のオーケストラと言われます。しかし、その源流を辿ると、中国、朝鮮半島、更にはインド、ペルシャはじめ多様な国の文化が入り交じり、沸騰するような熱い血の交わりから生まれる“日本”の姿が見えてきます。たとえば今回のチラシの、舞楽の装束や面の容貌をじっくり見ていると、これが本当に“日本”なのか、そのイメージが揺らいでこないでしょうか。そして時代も本当に古いのか、逆に現代アートではないのか、とも。千年も歴史を越えると、パラレルワールドのような別の“日本”が存在する錯覚さえ感じてきます。

こういった思いから2013年に《紫御殿物語》が作曲されました。今回演奏される《紫御殿物語・鳥瞰絵巻》は、《紫御殿物語》を俯瞰する(＝鳥瞰)絵巻という意味で、50分ちかい原曲から約半分の長さに編曲されたものです。しかしダイジェストである一方で、新たに副題もつけられ、原曲とまた違った魅力が生まれています。

オリジナルの《紫御殿物語》は《紫御殿》に始まり《紫ノ舞》に至る全10曲の組曲でした。これらの副題は全て花の名前から取られていて、まるで平

安王朝文学に出てきそうな、いかにも“日本らしい”雅やかな名前が多く見受けられます。ですが実は、どの花も元を辿ると中南米、東南アジア、アフリカなどの熱帯原産です。

また雅楽には人前でみだりに演奏してはならず、ごく一部の人にのみ伝わる「秘曲」が存在しました。あるいは和歌には「歌枕」という、多く詠み込まれる名所旧跡がありますが、その中には架空の場所もあったそうです。そこから想を得て、場所も時代も様々な出現する「紫御殿」という架空の御殿をイメージし、「紫御殿」でしか聴かれない幻の音楽という設定で作曲し、各曲に小さい物語を付しました。その物語は、たとえば在原業平と藤原高子の逢ひ引き先が紫御殿であった(《珠簾》)、安土桃山時代には南蛮音楽の技法を秘かに修得し、人知れず紫御殿で奏でた楽人がいたのではない(《紫紺野牡丹》)等々。歴史にif(もしも)は禁物と言われますが、この、「もしかしたら、こんな雅楽がかつてあった……かも知れない」という想像は、作曲家としても、そして日本史愛好家としても、刺激的なものです。

これらの考えを確信させてくれたのが、この「今昔雅楽集」で聴かれる数々の曲です。前回公演の《露台乱舞》の宴会芸としてのユニークな雅楽や歌、そして本公演の伎楽の、パレード音楽としての楽しさは未知の雅楽で、いわば雅楽の“自由”を感じさせるものでした。そこからイメージが拡がり、たとえば《行道乱声》は、終曲《紫ノ舞》のアイデアの元になっています。私自身、これらが一緒のプログラムで演奏されることが、とても楽しみです。

紫御殿ワールド、どうぞご期待下さい。

■紫御殿物語・鳥瞰絵巻

第一曲:あやかしの御殿のことなど(「紫御殿」「珠簾」)

第二曲:甘き朝と色香の吐息漏れる夕べのことなど(「蓮霧」「夕化粧」)

第三曲:虎の尾の煌めきと龍の火を吹きたることなど(「金虎ノ尾」「噴火龍」)

第四曲:南蛮渡来の秘曲とねじれる時間の秘法のことなど(「紫紺野牡丹」「果物時計」)

終曲:天空の遊びと地上の舞のことなど(「極楽鳥花」「紫ノ舞」)

●プロフィール

伊左治直(いさじ すなお)

現代音楽系の作曲からブラジル音楽のライブなど、様々な活動を展開。芥川作曲賞、出光音楽賞、2018年「南蛮劇場—伊左治直 個展」で佐治敬三賞を受賞。



■公演情報

今昔雅楽集 二、舞の絵巻

2019.7.6(土) 17:00(16:45プレトーク)

一般¥3,500/

U-25(25歳以下)¥1,000 [全席指定]

●プログラム

芝 祐靖 復曲:伎楽 行道乱声、獅子、迦楼羅
伊左治 直:紫御殿物語・鳥瞰絵巻
舞楽 青海波、蘭陵王、落蹲 ほか

トッカータ ～バロック音楽の100年に“触れる”～ 西山まりえさん(チェンバロ&バロック・ハープ)インタビュー

文・聞き手:篠田大基



©Naoya Yamaguchi

6月16日(日)の「ちょっとお昼にクラシック」には、チェンバロとヒストリカル・ハープという2種類の古楽器を操るユニークな音楽家、西山まりえさんが登場。音楽作品の背景にある歴史に目を配らせ、工夫をこらしたコンサート・プログラミングで定評のある西山さんから、今回の公演用に提案されたプログラムは、「トッカータ特集」。16世紀イタリアで活躍した作曲家C. メールロ(1533～1604)に始まり、G. フレスコバルディ(1583～1643)、J. J. フローベルガー(1616～1667)、D. ブクステフーデ(ca. 1637～1707)を経て、J. S. バッハ(1685～1750)に至るトッカータの歴史をチェンバロとバロック・ハープで年代順にたどるというコンセプトです。

プログラム案をいただいた2月半ば、西山さんにお話をうかがいました。場所は高円寺の西山さんのスタジオ「Mサロン」。今回の公演にも使われる二段鍵盤チェンバロやバロック・ハープなど数々の美しい楽器に囲まれた空間でインタビューをさせていただきました(協力:ムジカキアラ)。

——なぜトッカータなのでしょう？

実はこれ、ずっと温めていたアイデアだったんです。チェンバロの音楽で一番有名な作曲家といえば、間違いなくバッ

ハですよね。そのバッハのなかで、誰でも聞き覚えがある曲といえば、やっぱりあの〈トッカータとフーガ ニ短調〉でしょう？「フーガ」については学校の音楽の授業でも習いますけれど、では「トッカータ」って何のことか知られているのかなって思ったんです。17世紀はトッカータが爆発的に作られた時代なんです。だから、バロック時代が始まる頃、1598年にイタリアで出版されたメールロのトッカータから始めて、バッハまでのトッカータの流れをチェンバロとバロック・ハープでたどるコンサートができれば面白いなあと思ったんです。

——トッカータは、フーガの前などに演奏される技巧的な曲ですよ。事典で調べると、「触れる」という

意味のイタリア語の“**toccare** (トッカーレ)”が語源で、楽器に触れる手の器用さを見せる音楽とあります。

“toccare”を英語で言えば“touch (タッチ)”です。もちろん楽器に「触れる」という意味もありますが、でもトッカータはそれだけの意味ではなかったかもしれない。たとえば外国の人と話をするとき、“touch”という言葉はよく使いませんか？「物に触れる」というときだけでなく、「心にピッときた」というときに“touch my mind”とか、「連絡を取り合いましょう」というときに“keep in touch”とか。心が通じ合うというとき、“touch”はいつも使う言葉なんです。そこで私なりの持論ですけど、楽器と自分が触れ合う、それを通じて音楽と自分の心がつながるような感覚が、トッカータにはあると思うんです。さらに言うと、トッカータは17世紀には教会のミサや典礼の最初に弾かれましたから、もしかしたら、神様とか天界とか、自分を超越する偉大なものとつながるような意味合いもあったのではないのでしょうか。

ミサで最初に弾かれるトッカータは、ほとんど即興演奏で、それを後から楽譜に書き起こして出版されたんです。私自身、即興演奏をするときというのは、自分のなかにインスピレーションが降りてくるかどうか……ものすごい恐怖なんです。それでも弾き始めると、不思議とどこからか音楽が生まれてきて、その尊い時間の流れのなかに足をぐっと踏み込んでいける。トッカータを演奏するときも、自分の心と音楽が触れ合って、最後にはつながり合うように感じら

れると、その曲もその後の曲も、その流れの上に乗れる気がするんです。だから私にとってトッカータは、これから演奏するというときの大事な「始まりの儀式」、「音楽の礼拝の時間」なんです。そんなわけで、「トッカータ」という曲名の「触れる」という意味合いは大切だと思っていました。

——トッカータには演奏技巧を見せるだけにとどまらない、もっと深い意味が込められていたんですね。

トッカータには、たしかに技巧的な激しく動くパッセージもあります。それは、17世紀のとくにイタリアの音楽の場合、カトリックの礼拝と密接な関係にあるんです。当時の教会は優秀な音楽家を雇って彼らに演奏をさせることで、教会に人を集めようとしていました。今回演奏するフレスコバルディは、ローマのサン・ピエトロ大聖堂でオルガンを弾いて3万人の群衆を集めたといいますが、誇張もあると思いますが、すごいですよね。「あそこの教会に行くと、すごい音楽が聴けるらしい」と沢山のの人に知ってもらうには、音楽が派手になっていくのも仕方ないことですね。

でも私には、17世紀初めのメーロ口などのトッカータは、もっと内省的な音楽に感じられるんです。この感じをお伝えしたく、コンサート前半のトッカータには、神秘的な雰囲気が漂う曲を選びました(笑)。人々が教会に集まるのは、音楽を聴くためではなくて、死後に天国に行けるように罪の赦しを得るためでしたから、音楽を聴くという行為も、音楽を通して自分が天界とつながりたいという気持ちからではないでしょうか。

そんな初期のトッカータからバッハのトッカータまでをたどっていくと、だんだんと技巧的になって、使わ

れるモチーフも耳に残りやすくなるし、曲の規模も大きくなります。ブクステフーデのトッカータはバッハに本当にそっくりで、バッハはブクステフーデに相当影響されたと思いますね。でもバッハのトッカータは、ブクステフーデよりもっと規模が大きくなっています。



——バッハのトッカータ ハ短調 BWV911は演奏時間が10分を超える大曲ですね。ブクステフーデまでのトッカータが長くても5分程度だったのに比べると、圧倒的な長さです。どうしてバッハはこんな曲を作ったのでしょうか？

バッハにしてみれば「どうだ！」って言わんばかりだったかもしれませんがね。神を讃えて、同時に神に仕える自分のすごさも見せるかのような、そういう音楽になっています。このトッカータは、バッハの死後、19世紀初頭に1曲ずつバラバラに出版、販売された現存する7曲のうちの1曲ですが、書かれたのは20歳前後の時期で、若さがみなぎる、弾く人に対して容赦のない力作ですね。このトッカータ集のCDを作ろうと、昨年末に録音したんですが、どの曲も長いうえに、3声、4声が一遍に右手にからまってきたり、しかもそれがものすごく速かったりして、「私の右手、どうなっちゃうんだろう」と思ったくらい。そのなかで今回演奏するハ短調の曲は、同じテーマが何回も何回も繰り返し出てきて、弾く者としては体力的にも精神的にも大変です。でも素晴らしいんです！

——教会や神、あるいは王侯貴族に仕える音楽家から、一人の人間とし

ての音楽家へ、音楽家の姿も変わっていくわけですね。トッカータの流れをたどると、そんな歴史も見えてきそうです。

音楽を聴くとき、作品の歴史的な背景が分かると、音楽自体も面白くなるということがあると思うんです。バッハが先人たちのアイデアや様式に自分なりに手を加えて、あれだけの大曲が生まれたわけですが、そこまでのトッカータの流れを伝えられたら、バッハのすごさ、素晴らしさも、もっと深く理解していただけたと思います。

■公演情報

ちょっとお昼にクラシック
西山まりえ
(チェンバロ&バロック・ハープ)

2019.6.16(日) 13:30

¥1,500 [全席指定/1ドリンク付き]

●プログラム

メーロ口:第2旋法のトッカータ 第5番
フレスコバルディ:トッカータ 第8番
フローベルガー:トッカータ 第2番 二短調
ブクステフーデ:トッカータ ト長調
BuxWV165

J.S.バッハ:トッカータ ハ短調 BWV911

ほか

水戸芸術館のステージに立とう! ～出演者、参加者募集～

文:中村 晃

水戸芸術館音楽部門では、アマチュアの愛好家の方からプロフェッショナルの音楽家まで、多くの方々にコンサートのステージに立っていただく、様々なプログラムを行っています。これから募集を開始する3つの企画について、ご案内いたします。

演奏家たちが全力を注ぐ栄光のステージ「茨城の演奏家による演奏会企画」



茨城にゆかりのある演奏家及び演奏団体の皆様に、独立した1回のコンサートをご企画、ご出演していただく演奏会企画です。これまでに、数多くの名演が繰り広げられてきました。ある若手演奏家の方は、音楽大学を卒業し、演奏家としてのキャリアの記念すべき第一歩として、デビュー・リサイタルを行いました。ある演奏家の方は、すでに日本各地で活躍されていて、リサイタル・ツアーの一環として故郷に錦を飾りました。また、数多くの音楽愛好家の方々が、毎日の仕事や家事などで忙しい時間をやりくりして、人生の喜びとして、合唱団や吹奏楽団の一員としてステージに立っています。そして、地域の

音楽活動を牽引する、ベテランの演奏家の方々が、演奏活動の柱の一つとして、継続的に公演を重ねていらっしゃいます。

選考はデモ音源と書類をもとに行います。2020年度の応募受付は5月7日(火)～6月7日(金)。水戸芸術館のステージに立った名演奏家たちの系譜に、あなたの名前を連ねてみませんか!

2019年度の実施企画は次の通りです。

11.4(月・祝) 高山三智子[ピアノ]、12.14(土)Corodia[女声合唱]
12.15(日) Duo la Bilancia[2台ピアノ]、2.11(火・祝) 兼氏規雄
[クラリネット]、2月 Nexus Brass Band[英国式金管バンド]
3.1(日) 水戸うらら女声合唱団[女声合唱]、3.7(土) 井上 修
[ピアノ]、3.8(日) M.L.R. [女声合唱]、3.15(日) 所 香菜[ピアノ]
3.28(土) 塙 美里[サクソフォン]、3.29(日) あひる会合唱団
[混声合唱](敬称略)

人類の理想を天高く歌い上げる「水戸の街に響け! 300人の〈第九〉」

「人類最高の芸術作品」と賞賛されるベートーヴェンの〈交響曲 第9番〉。その第4楽章には、人類の連帯、世界の平和の願いが託されたシラーの詩による独唱と合唱が付けられています。この合唱パートの参加者を毎年募集しています。毎年12月に水戸芸術館広場を会場として、大空に向かって歌声を響かせます。器楽パートは2台のエレクトーン、2台のピアノ、ティンパニが受け持ちます。今年で19回目を迎える公演ですが、今や合唱参加者は300名をはるかに超え、就学前のお子さんか

ら80代、90代のベテランの方まで450名近くに達しようとしております。コーラス経験の有無は問いません。9月から始まる練習(全6回)にご参加いただくことが参加条件となります。

今年の公演日は12月8日(日)。7月31日(水)応募締切。皆で人類の理想のしるべを天高く、歌い上げましょう!



降り注ぐ光の如き聖なる楽器、パイプオルガンを弾く「市民のためのオルガン講座」



ヨーロッパの教会では、天から降り注ぐ光のような荘厳で輝かしい響きを持ち、神の奏でる音楽を現前させるパイプオルガン。この楽器の王様とも呼ばれる大オルガンの実技レッスンを行う講座が「市民のためのオルガン講座」です。講師は、ソロ活動に加え、日本の主

要オーケストラとの共演を重ね、2010年には小澤征爾水戸芸術館館長指揮によるサイトウ・キネン・オーケストラのカーネギーホール公演にも出演しているオルガニストの室住素子さん。講座は、6か月間12回のレッスンを経て、最後に発表演奏会に出演していただく実技レッスンコースとパイプオルガンを気軽に楽しんでいただく1回体験コースがあります。選考は申込書類をもとに行います。募集期間は4月2日(火)～5月31日(金)。オルガンへの熱い思いを書き綴って、ポストへGO!

今回紹介した事業以外にも、出演者オーディションを経て、コンサート出演していただく「茨城の名手・名歌手たち」や水戸市民の皆様の発表の場である「水戸市芸術祭」など、水戸芸術館のステージに立っていただく様々な企画を行っています。皆様のご参加をお待ちしております。

「ブンカ」と「ゲージュツ」のはなし

その2 芸術の誕生

文：中村 晃

前回ご紹介したように「文化」という大きな枠組みの中のひとつの構成要素が「芸術」である。今回は、この「芸術」についてのお話の第1回目。

文学、音楽、美術、演劇、舞踊などをひとまとめにして一つの領域とみなす「芸術」という概念は、18世紀の中頃、つまり近世の西ヨーロッパで誕生したものであるとされている。それならば、中世を代表するギョーム・ド・マショーやルネサンスのオケゲム、ジョスカン・デ・プレ、そしてバロック期のモンテヴェルディ、J.S. バッハの音楽でさえ、「芸術」では無いということになりそうである。確かに、これらの作曲家たちが生きた時代には、個々のジャンルを一つにまとめる言葉として「芸術」という語は存在していなかった。18世紀中ごろ以降の近代の人たちが、「芸術」という概念を過去に投影することで、これら古い時代を含む芸術としての音楽の歴史を作り上げているのだ。

今日「芸術」を意味する「art(英語、フランス語)」のそもそもの語義は、「技術」である。中世における「art」は、「自由な技術[自由学科](liberal arts)」と「機械的技術[熟練的技術](arts mécaniques)」に大きく二分されていた。これらの分類は古代以来の伝統を持ち、大学における一般教養科目を構成していた「自由な技術[自由学科](liberal arts)」(具体的には文法・修辞学・論理学の3学と算術・幾何・音楽・天文学の4科)に対して、「機械的技術[熟練的技術](arts mécaniques)」の多くは職人仕事に属するものとされていた。ちなみに音楽や詩は前者に属する一

方で、造形美術などは後者として扱われており、社会的なステータスに格差があったことは興味深い。

18世紀に入り「芸術」と言う言葉の成立を試みた最初の例の一つが、バトウー(1713-80)の『唯一の原理に還元された諸芸術』(1747年)だ。バトウーは技術を意味する「art」という名詞に「美しい(beaux)」という形容詞をつけた「美しい技術(beaux-arts)」を「芸術」と表現し、他の技術(art)と区別した。その後、「art」という名詞に形容詞をつけて「芸術」という術語を作り出そうとする試みは、バトウーに限らず18世紀中頃のさまざまな理論家たちによって為されたが、バトウーのドイツ語訳(1751年)をきっかけにフランス語の「beaux-arts」の直訳である「schöne Künste」という語句が定着していく。日本でも当初(明治5年/1827年以後)は、これを直訳した「美術」が芸術の意味で用いられた。その後、日本語で「芸術」と「美術」の区別が定着したのは明治30年(1897年)以降のことだが、最初に「藝術(「芸術」は後世に手が加えられた略字体表記)」という訳語を用いたのは明治16年(1883年)の中江兆民と考えられている。

ここに至って、近代的な「芸術」観が誕生した背景には、「美しい」という概念が大きく関わっていることが分かりただけかと思う。18世紀中頃には「芸術」一般を対象とする学問としての「美学(aesthetica)」も生まれている。この学問の道を拓いた一人がバウムガルテン(1717-62)で、『美

学』という表題をもつ書物を1750年に著している。実は、18世紀以前の合理主義の時代にあつては、理性こそが人間の知性を高みへと導く最も重要なものであり、「美しい」などという感性的、想像力が作用する領域は反理性的なものとして、人々を誤った方向に導くものとして批判的に捉えられていた。バウムガルテンは、この感性的な能力を反理性的なものではなく、理性の下位に位置するとはいえ、理性に類する認識能力であるとして、美学を学問として成立させようとした。しかし、このような考えのもとでは、「芸術」は、理性的なものに比べて劣ったものとしてとどまってしまうことになる。これに対し、「芸術」により高次の本質的な意義を与えたのが、カントをはじめとするドイツ観念論の哲学者たちである。そして、このドイツ観念論の思索の到達点として登場したヘーゲルは、「芸術」の頂点ばかりか、その終焉について語っているのだ。



●参考文献

小田部胤久『芸術の逆説 近代美学の成立』(東京大学出版会 2001)
小田部胤久『ヘーゲル美学における芸術の終焉と新生』(『ヘーゲルを学ぶ人のために』所収 世界思想社 2001)
今道友信『美学とは何か』、佐々木健一『近世美学の展望』(『講座美学1 美学の歴史』所収 東京大学出版会 1984)

INFORMATION

チケット・インフォメーション

《4.21(日)発売分》

■水戸室内管弦楽団 第103回定期演奏会
(第2部指揮:小澤征爾、ピアノ:マルタ・アルゲリッチ)
5.26(日) 19:00、5.28(火) 19:00

《5.25(土)発売分》

■ルドルフ・ルッツ オルガン・リサイタル 8.9(金) 19:00

■ちょっとお昼にクラシック

上野耕平(サクソフォン)
9.1(日) 13:30

■カルテット・プレミアム・シリーズ Vol.1

ハーゲン弦楽四重奏団
9.29(日) 15:00

《6.29(土)発売分》

■茨城の名手・名歌手たち 第29回
9.8(日) 時間調整中

■村治佳織 ギター・リサイタル

9.21(土) 15:00

5〜7月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆茨城の名手・名歌手たち 第29回 出演者オーディション
5.6(月・振) 時間未定(応募状況により4月中旬決定) 入場無料

◆水戸室内管弦楽団 第103回定期演奏会
(第2部指揮:小澤征爾、ピアノ:マルタ・アルゲリッチ)
5.26(日) 19:00、5.28(火) 19:00
料金[全席指定]S席¥20,000/A席¥18,000/B席¥15,000

◆ちょっとお昼にクラシック
西山まりえ(チェンバロ&バロック・ハープ)
6.16(日) 13:30 料金[全席指定]¥1,500(1ドリンク付き)

◆今昔雅楽集 二、舞の絵巻(出演:伶楽舎)
7.6(土) 16:45プレトーク、17:00開演
料金[全席指定]一般¥3,500/U-25(25歳以下)¥1,000

◆高校生のための水戸室内管弦楽団メンバーによる公開レッスン
7.15(月・祝) 時間未定 入場無料

エントランスホール

◆パイプオルガン ブロムナード・コンサート(入場無料)

- 5.4(土・祝)《ゴールデンウィークスペシャル》
川越聡子、南條由起(ヴァイオリン) 13:00〜13:45
- 5.18(土) 東方理紗 12:00〜12:30/13:30〜14:00
- 6.15(土) 安井歩 12:00〜12:30/13:30〜14:00
- 6.22(土) 佐藤初音 12:00〜12:30/13:30〜14:00
- 6.30(日) 尾崎麻衣子 11:00〜11:30/12:30〜13:00
- 7.15(月・祝) 加藤慶子 12:00〜12:30
- 7.20(土) 栗山美緒 12:00〜12:30/13:30〜14:00

◆ブロムナード・コンサート EXTRA(入場無料)

5.19(日) 12:30〜13:15
島田真千子(ヴァイオリン)、中田恵子(オルガン)

2019年4月9日発行(第233号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、石井亮子、小野瀬咲子

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30〜18:00・月曜休館) <https://www.arttowermitsuo.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

編集後記

行楽シーズン恒例、国道6号の大渋滞に巻き込まれ、イライラを解消すべく一人カラオケ大会をしつと思いました。「最初に車にオーディオを搭載しようと考えてくれた人、ありがとう。」NO MUSIC, NO LIFE (り)

先日、実家で飼っているリスのくうちゃんに冬眠の危機が訪れて大騒ぎでした。体は冷え、本人は何かしらの危機か!?と言わんばかりにキーキー鳴き、急いで温めてなんとか回復。季節の変わり目の寒暖差は人間もリスも苦手なようです。(咲)

1920年代のパリに憧れるアメリカ人がタイムスリップして、ヘミングウェイやダリなどの芸術家と出会う映画「ミッドナイト・イン・パリ」。ストラヴィンスキーやサティなどの音楽家も出てきたら・・・妄想が膨らみます。(満)

◆ステファニー・アルゲリッチ写真展

ヨーロッパを中心に写真家、映像作家、プロデューサーとして活躍するステファニー・アルゲリッチ氏による写真展を開催します。



5.18(土)〜6.2(日)
9:30〜18:00(月曜休館)
★アーティストトーク 5.26(日) 18:10〜
同会場にて、作家が自身の作品についてご紹介いたします。

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆水戸芸術館ACM劇場プロデュース

アフター・ザ・シアトリカル・デイズ『ECTO(エクト)』

監督・脚本・編集・音楽:渡邊琢磨 抽象場面監督:TAKCOM

映像出演:染谷将太、川瀬陽太/佐津川愛美

演奏:徳澤青弦、梶谷裕子、千葉広樹、鈴木正人 ほか全13名



5.25(土) 13:00/17:00
5.26(日) 14:00
料金[全席指定]一般¥3,000/
U-25(25歳以下)¥1,500

『ECTO』©2019 MITO ARTS FOUNDATION

現代美術ギャラリー

◆日比野克彦「明後日朝顔プロジェクト2019水戸」

5.18(土) 10:00〜17:00 苗植え

※小雨決行(荒天時は翌日順延)



[参加費]無料
[会場]広場(2階回廊)、水戸京成百貨店外壁
[集合場所]広場(2階回廊)

アルゼンチンのワインといえば
マルベック!牛肉と合うんだよなあ。



水戸室内管弦楽団第103回定期演奏会を前に、楽団員の島田真千子さん(ヴァイオリン)は5月19日(日)の「ブロムナード・コンサートEXTRA」にも出演されます。中田恵子さんが弾くパイプオルガンとの共演をお楽しみに!(篠)

遠近両用メガネを新調しました。どんなものでも両用は便利ですが、扱いには慣れと注意が必要ですね。さすがのシャア様も水陸両用は少し勝手が違ったのでしょうか。今年はガンダム40周年。そりゃ近くが見えにくくなってきますな…(て)

ヴェネツィア冬の夜明け前。水上バスに乗って霧の街を眺めていると、濃紺の空のもと運河沿いのランプの橙色が水にゆらめいて絵の中にいるようだった。フェニーチェ劇場での華やかな夜から翌朝まで、ほんの束の間の、でも奇跡のような旅時間。(樹)

茨城県の「子ども文化芸術大学」という事業の委託を受け、県内2つの小学校でワークショップを行った。講師は、打楽器奏者の加藤訓子さんと彫刻家の石川理さん。石川さん製作の丸太をくり抜いたログドラムを使い、加藤さんが太鼓を叩く醍醐味を子供達に伝えた。(中)